

# 京都フィロムジカ管弦楽団 第47回定期演奏会

2021年6月27日(日) 八幡市文化センター

※1時20分ごろより、舞台上でプレ・コンサート開催(内容は次頁をご参照ください)

午後2時開演

アレクサンドル・グラズノフ／祝典序曲 作品73

Александр Глазунов : Торжественная увертюра, соч.73

ヨーゼフ・ハイドン／交響曲第100番『軍隊』

Joseph Haydn : Symphonie Nr.100 Militärsinfonie

—休憩—

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー／交響曲第2番

Пётр Ильич Чайковский : Симфония № 2

京都芸術センター制作支援事業

指揮 葛城 郁也 (かつらぎ ふみや)

12歳よりフルートを始める。京都堀川音楽高等学校を経て大阪音楽大学を卒業。大学卒業時に京都府新人演奏会に出演。大学在学中より指揮者としての活動も始める。学校主催の演奏会をはじめ、自らが主宰を務める学生有志による吹奏楽団「ウインドアンサンブル・フィオーレ！」にて新曲作品演奏や、学生オペラ(tutti)にて喜歌劇「こうもり」を指揮し好評を得た。

2018年度より、長浜フェスティバルオーケストラの副指揮者を務める。現在は関西を中心にソロやアンサンブルでの演奏活動の他、指導者としてオーケストラや吹奏楽団、合唱団などをはじめ後進の指導も精力的に行っている。

フルートを富久田治彦、虎谷朋子、長山慶子、清水信貴の各氏に、室内楽を清水明氏に師事。

Universal Flute Orchestra Japan 及びカラフルカルテットメンバー。YAMAHA 管楽器インストラクター。



## お客様へのお願い

- 間隔をあけて御着席ください。入退場時も周りの方と間隔をあけてお進みください。
- 常時マスクの着用をお願いいたします。手指のアルコール消毒も積極的におこなってください。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。休憩中も大声での会話をお控えください。
- ブラボーやブーイングなど声を発する感情表現はお控えください。
- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。
- 演奏中の客席へのご入場、客席での飲食、喫煙、写真撮影、録音・録画は固くお断りいたします。

# プレ・コンサート

## ブラームス／クラリネット五重奏曲 口短調 作品 115 より 第1楽章

Cl.浦野幸栄 Vn. 古川葵、木村保威 Va. 赤崎晃子 Vc.秦野貴生

クラリネット五重奏曲はブラームスを代表する室内楽の1つです。冒頭、第1・2 ヴァイオリンによる提示部から始まるソナタ形式です。そしてクラリネットにピアノでメロディーがひきつがれていきます。ブラームスの心に染みるメロディーと自由さを感じていただき、第1楽章をお楽しみください。(浦野)

## テレマン／トランペット協奏曲 二長調 より 第4楽章

Tp.遠藤啓輔 Vn.木村保威、浅田正恵、小幡拓也、稲葉道一 Va. 赤崎晃子、森川貴之 Vc.奥村友梨香、内田裕之 Cb.山口奈央子

クラシック音楽史上、最も多くの曲を残したと言われるテレマンの作品です。二長調というのはこの曲の為にあるのかと思えるほど煌びやかです。(多田)

## グノー／小交響曲 より 第1楽章

Fl.永井沙織 Ob.嶋谷賢治、服部光紀 Cl.藤田遥、植山彩香 Bn.音謙一、川瀬明 Hr. 津田啓吾、汐崎絵梨菜

グノーはバッハのプレリュードを伴奏とした「アヴェ・マリア」が特に有名ですが、室内楽曲も数多く作曲しており、その中でも今回演奏する「小交響曲」はよく演奏されます。今回は第1楽章を演奏します。明るい雰囲気での息の合った演奏をお楽しみください。(嶋谷)



## 曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

### グラズノフ／祝典序曲 作品 73

グラズノフ(1865~1936)はサンクトペテルブルク生まれで、16歳で作曲した交響曲で成功を収めるなど早熟な天才であった。1899年には故郷の音楽院の教授となり、革命後のソヴィエト連邦時代をも通して、ショスタコーヴィチを筆頭に偉大な音楽家たちを世に送り出した。

本日演奏する『祝典序曲』は、グラズノフが活動の主体を作曲から教育へと移しつつあった1900年の作品である。原語のТоржественнаяには「厳粛な」という意味もあるようなので、特定の式典のために書かれた作品ではなく、「荘厳な管弦楽作品」といった意味のタイトルと考えるのが良いのかもしれない。打楽器が大活躍することから豪勢な印象を受けるが、管楽器の編成は意外と簡潔で、おおむね各パート2人が基本である。にもかかわらず、様々な音楽要素が多層的に重なり合い、豪華な響きを生み出している。主旋律のみならず、伴奏の刻みですら、その色彩の変化が魅力的である。師・リムスキーコルサコフ譲りのオーケストレイションの技が冴えていると言えよう。

冒頭から英雄的な主題が逞しく展開するが、対照的に甘美な歌謡主題も用いられて、これらが後半でも再現される分かりやすい構成を取る。そして、実に多くの要素が高密度に詰め込まれており、さらに、オーケストレイションの技術によって提示部と再現部で色彩感が大きく変化しているので、「音楽をたっぷり聴けた！」という充足感は途方もない。わずか10分の演奏時間で、この大曲の風格を持った音楽を展開してしまうことに驚かされる。

### ハイドン／交響曲第100番 ト長調 『軍隊』

交響曲はコンサートにおける花形の一つだが、これはハイドン(1732~1809)の活躍があつてのことだ。もともとオーストリア・ハンガリー帝国を拠点に活動していたハイドンは、興行師ザロモンのプロデュースにより、ロンドンに出向いて多数のコンサートを開催。そこで聴衆を熱狂させたのが新作の交響曲の数々だったのだ。本日演奏する『軍隊交響曲』もそれらの一つで、とりわけ評価が高く、1794年の初演以降、短期間に何度も再演された。この怖そうなタイトルは初演時から付いていたものだが、これは軍楽隊で使用する大太鼓やシンバルなどの打楽器が第2・4楽章

に用いられていることに拠る。むしろ全体的な印象は爽快で、可愛らしいとさえ言える。可愛らしい音楽と厳めしい軍楽隊の意外な取り合わせ、その非凡な発想こそハイドンの真骨頂と言えよう。交響曲は、作曲家が自らの真価を世に問うジャンルであると同時に、何をやっても許されるジャンルとしても発展し、20世紀になると「交響曲」の中で風や雷の効果音を鳴らす作曲家さえ出て来る。こうした「何でも有り」のジャンルとしての交響曲のルールは、ハイドンが既に敷いていたと言えよう。

**第1楽章 (Adagio – Allegro)** は、ゆったりとした遅いテンポの序奏で始まるが、主部は爽快地に風が吹き抜けるような速い音楽に変貌する。主部の主題は、底抜けに明るい第1主題と、ちょっと戸惑ったような表情を見せる第2主題が順番に提示され、それらが楽章の後半で再現される、という、分かりやすいソナタ形式で書かれている。コーダではまるで熊が吠えるように低音楽器が活躍し、ハイドンの破天荒な面白さをも存分に楽しめる。

**第2楽章 (Allegretto)** は軍楽隊の打楽器のほか、クラリネット2本も加えられた大編成になる。この楽章の前半部分は、ハイドンが数年前に作曲した「2台のリラ・オルガニザータのための協奏曲ト長調(Hob. VIIh:3)」の第2楽章をそのまま転用してオーケストレーションを施したものだ。リラ・オルガニザータなる楽器を動画で見ると、卓上サイズのオルガン状のものようで、ストリートオルガンのような真っ直ぐで素朴な音色である。『軍隊交響曲』は第2楽章にだけクラリネットが用いられていることが不可解なのだが(軍楽隊の一員としてクラリネットを加えた可能性も考えられるが、それでは第4楽章にクラリネットが無いことの説明がつかない)、ひょっとすると、リラ・オルガニザータの音色をクラリネットで再現しようとしたのかもしれない。

第1楽章のようなスピード感は無いが、程好い推進力をもって親しみやすいメロディーが織り成される。これが中間部では愁いを帯びた短調に変わり、打楽器も加わった喧騒となる。リズムはほとんど変わらないのに音楽の印象はガラリと変わる、ハイドンの簡潔かつ豪快な音楽の楽しさがある。しかしハイドンのさらなる破天荒さが楽しめるのは楽章の後半だ。音楽が長調に戻って静かに気持ちよく終わった、と思われた瞬間、兵隊ラップが平穩をぶち壊すように乱入してくるのである。このラップのリズムは、楽譜上は単なる3連符で書かれているが(譜例1)、当時の暗黙の了解として、前のめりに駆け込むような吹き方をしていたに違いない。『軍隊交響曲』から110年を隔てて、マーラーも交響曲第5番で同じリズムを使用した(譜例2)。メモ魔のマーラーが楽譜に「軍隊ラップの奏法のように、加速気味にアフタクトを吹け」と記入してくれたおかげで、軍隊ラップの奏法を知ることができる。



譜例1 ハイドン交響曲第100番・第2楽章より



譜例2 マーラー交響曲第5番・冒頭

前半2つの楽章は、主題の変化や再現を楽しむ思索的な遊びを追求する音楽であった。これに対して**第3楽章 (moderato)** は、舞曲のメヌエットであり、頭よりも身体感覚で楽しむ音楽と言える。思索的な音楽を中心に構成された中に、舞曲を交えることは、脳をリフレッシュさせるうえで極めて効果的で、交響曲というジャンルがクラシック音楽の花形となった所以の一つと言って良い。舞曲は、主部だけでなく、ダンサーの休息时间となる中間部(トリオ)も重要な要素だが、ここでもハイドンが破天荒な茶目っ気を見せる。踊り手の疲れを癒すかのような軽い音楽で始まったのに、後半ではトランペットやティンパニが傲然と殴り込んでくるのだ。もしも舞踏会でこのメヌエットを演奏したなら、居合わせた人々は仰天するに違いない。

終楽章となる**第4楽章 (Presto)** は、第1楽章と同様にソナタ形式だが、テンポは一層速く疾走するようだ。この楽章でも軍楽隊の打楽器が鳴り響き、賑やかに盛り上がる。

## チャイコフスキー／交響曲第2番 作品17

ハイドンが聴衆を熱狂させた「交響曲」を、スラヴの民謡を素材にして作り上げようとしたのがチャイコフスキー(1840～1893)である。チャイコフスキーはロシアの人だが、ウクライナを頻りに訪問して現地の民謡にも触れており、この交響曲第2番にはウクライナの民謡が要所で使用されている。この曲は1873年に初演し成功を収めたが、チャイコフスキーはそれに満足せず大幅な改訂をする。本日の演奏も1880年の改訂稿による。

**第1楽章 (Andante sostenuto - Allegro vivo - Andante sostenuto)** は、愁いを帯びた旋律(ウクライナ民謡)が、ホルンとそれに続いてファゴットでゆったりと歌われる。この序奏部分が焦燥感を伴った盛り上がりを見せた後、再びホルン・ソロによる民謡に帰っていく。すると、突然、速く厳めしい音楽に変貌する。ここからアレグロの主部になる。第2主題は憧れに満ちた伸びやかな歌で、第1主題の切迫感とは好対照をなす。『軍隊交響曲』と同様の、序奏を持ったソナタ形式と言える。しかしこの曲がハイドンと異なるのは、楽章の最後で冒頭の民謡へと帰っていき、静かに消えていく点だ。いわば、民謡によるメロディーの大陸の中に、ソナタ形式の堅牢な形式美を誇る音楽を挿入したような、凝った構成だ。展開部の最後で急激にテンポを落とすことで、再現部に突入する強烈なエネルギーを生み出しているのも破格である。この見事な構成は、改訂によって実現したものだ。改訂前の音楽は、魅惑的なメロディーたちが歌い交わされながら盛り上がっていた。その自由な感情の発露は、魅力的だが、散漫な印象も受ける。この曲は、改訂によって立派な構成美を獲得し、思索の芸術としての交響曲へと転換されたと言えよう。

**第2楽章 (Andantino marziale, quasi moderato)** は、数年前に作曲したものの結局上演されなかったオペラ『ウンディーナ』の、結婚行進曲を転用したものだという。ティンパニが「ミ♭、シ♭、ミ♭、シ♭…」と軽快に先導するのに対して、楽しく可愛らしい行進曲が様々に楽器を換えながら歌い継がれる。最後はまたティンパニに帰っていく、というのも第1楽章と同様、凝った構成だ。

ハイドンは第3楽章にメヌエットを使用したが、ベートーベン以降、交響曲の第3楽章には「スケルツォ」が置かれることが主流になった。「スケルツォ」は、リズムに舞曲的な身体性を残しつつも、暴発するような楽しさが前面に出た音楽、と言えようか。そして僕が見る限り、チャイコフスキーはスケルツォを書くのを苦手にしてきたように思われ、この曲の**第3楽章 (Scherzo. Allegro molto vivace)**にも苦心の跡がうかがえる。4小節単位の要素と3小節単位の要素を組み合わせたり、民族舞曲風の音楽を中間部に使用したり、と様々な工夫がなされているのだが、作り込み過ぎたために、自然な躍動感が失われてしまったように思われるのだ。ただし、僕たちアマチュアが必死になって複雑な音楽に取り組むことで、作曲者の艱難辛苦とシンクロし、チャイコフスキーの肉声が聞こえるような演奏を実現できるかもしれない、と秘かに期待している。

**第4楽章 (Finale. Moderato assai - Allegro vivo - Presto)** は打楽器も加わった豪華な音響で、民族舞曲風の激しい主題と憧れに満ちた歌謡主題とが複雑に絡み合って聴き応えのある音楽が展開される。謎めいているのは1回だけ打たれる銅鑼。音響が低音に向かってどんどん下降していくとどめの一発として打たれるので、地獄落ちのようなイメージなのかもしれない。後にチャイコフスキーは、死の直前に書いた交響曲第6番『悲愴』の終盤で、死の象徴として銅鑼を1回叩かせる。しかし交響曲第2番の場合は銅鑼が打たれた後、テンポが倍速になり、舞踏の狂乱のようになって興奮のつぼの中で大団円を迎えるのだ。



第48回定期演奏会(予定) 2021年12月26日(日) 文化パーク城陽 指揮:滝本秀信  
高田三郎:狂詩曲第1番『木曾節』 / グリーク:『パール・ギユント』組曲より抜粋 / チャイコフスキー:交響曲第6番『悲愴』